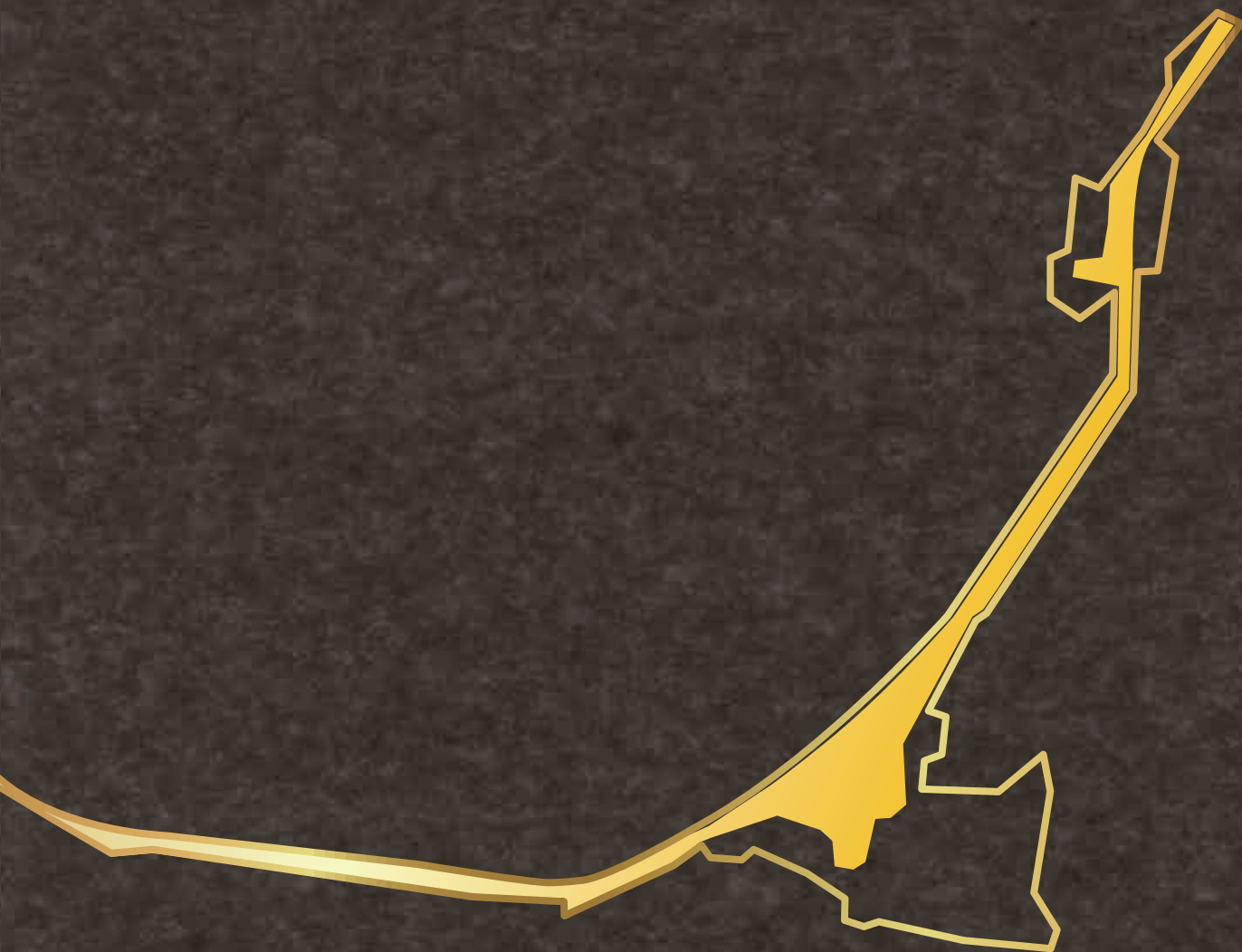


三池炭鉱跡の保存・公開・活用に関する計画

[荒尾市版]

ダイジェスト編

- ・ 史跡三井三池炭鉱跡 万田坑跡 専用鉄道敷跡 整備基本計画
- ・ 世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」
三池炭鉱修復・公開活用計画



2018(平成30)年3月

荒尾市

三池炭鉱後の保存・公開・活用に関する計画 〔荒尾市版〕

- 史跡三井三池炭鉱跡 万田坑跡 専用鉄道敷跡 整備基本計画
- 世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」三池炭鉱修復・公開活用計画

1 計画策定の概要

２０１５（平成２７）年７月にユネスコ世界遺産委員会において、本市の三池炭鉱跡万田坑跡及び専用鉄道敷跡を含む「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が、世界文化遺産への登録が議決された際に、世界遺産委員会から８つの勧告が示され、本市は「勧告b）推薦資産（の全体）及び構成資産に関する優先順位を付した保全措置の計画及び実施計画を策定すること。」に対応する必要があった。

本計画『三池炭鉱の保存・公開・活用に関する計画【荒尾市版】』は、史跡としての『史跡三井三池炭鉱跡 万田坑跡 専用鉄道敷跡 整備基本計画』と、世界遺産としての『世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」三池炭鉱修復・公開活用計画』の二つを兼ね備えたものである。

本計画策定にあたり、諮問機関である「荒尾市万田坑及び専用鉄道敷跡整備基本計画策定委員会」を設立し、平成28、29年度の2カ年で合計4回にわたる審議を行った。事業費の1／2は文化庁からの国庫補助である。

また、本計画は三池炭鉱遺産を共に所有する大牟田市とも連携しながら策定しており、大牟田市においても同様の計画【大牟田市版】が策定されている。

計画策定後は、文化財及び世界遺産の両方の視点から、それぞれの価値を損なうことなく、将来にわたり適切に保存継承しながら活用をはかり、本市のまちづくりや地域の活性化へと繋げていくものである。

計画の対象範囲



2 計画策定体制

基本方針

(1) あるべき将来像

明治期の産業革命におけるエネルギー生産の場である炭鉱の採炭・運搬のシステムと役割、そして石炭産業景観の広がりや重層化した歴史のスケール感を次世代へと継承し、これからのまちづくりのエネルギーとなる公開活用を進める。

(2) 2つの視点

今後望ましい史跡の将来像を実現するために、こういった史跡整備を行うべきか。保存の視点と活用の視点の2つの視点を提示する。

- ①保存の視点…何を守るのか～三池炭鉱発展の歴史：閉山の姿～
- ②活用の視点…何を伝えたいのか～三池炭鉱の歴史の変遷とその広がり～

修復及び整備

重要文化財である第二竪坑巻揚機室、第二竪坑櫓、倉庫及びポンプ室、安全燈室及び浴室、事務所、山ノ神祭祀施設の6つの建造物を対象として保存と活用に必要な修復を行う。

また、専用鉄道敷跡については、現況では概ね健全であることから、まずは調査研究計画に基づいた発掘調査及び測量調査を行い、現況の把握に努める。さらにモニタリングによる日常の現況調査を定期的に行い、将来の修復及び補強に備える。

活用

三池炭鉱は、大牟田市と荒尾市の市域を越えて存在し、「宮原坑」、「万田坑」、「専用鉄道敷跡」、「旧長崎税関三池税関支署」は一つの史跡として指定されていることから、両市で連携した活用をしていく必要がある。

案内、解説など多様なニーズに対応した活用を行っていくにあたっては、市民や見学者に向けた効果的なPRやイベント、学習機会を提供することで幅広い年代層の来訪を促す。

また、来訪者が目的地まで円滑に移動できるような誘導を行い、ボランティアガイドなどの人材育成や現地での案内や説明板、情報端末などによる解説、調査研究成果の公開などの活用を積極的に行うことで、価値への理解、多様な活動への参加意識の向上を図っていく。

事業の推進

本計画は、Ⅰ期（短期）、Ⅱ期（中期）、Ⅲ期（長期）の3期に分けて段階的な整備を行う。整備は、閉山時の姿を基本としながらも、かつて石炭が炭鉱マンによって掘り出され、専用鉄道敷で運ばれていた当時の姿を、見学者がより理解できるように見学エリアを広げていく。



第Ⅰ期

炭鉱における
主要機能となる
採炭の理解に
つながる事業

第Ⅱ期

三池炭鉱独自の
特徴となる
運炭の理解に
つながる事業

第Ⅲ期

三池炭鉱を
支えた人々の
生活の理解に
つながる事業

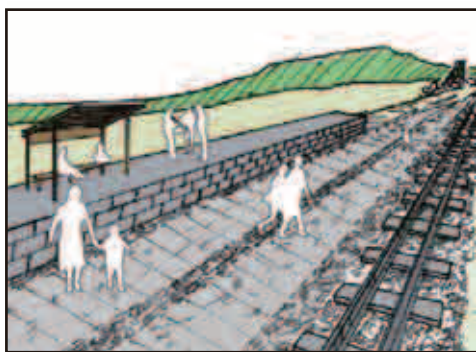
専用鉄道敷跡

整備方針

専用鉄道敷跡については、平成9年の閉山時の姿を基本に保存する。

専用鉄道敷跡は各坑口や工場等をつなぎ、石炭・人・モノを運搬する役割を担った。さらに、明治38年に三池港まで開通し、その後も大正・昭和・平成の閉山まで当初の姿のままで使用され続け、時代をつないで保存されてきた。

こうした特徴を来訪者が鉄道敷を実際に歩くことで理解できるような整備を行う。



プラットフォーム跡活用イメージ図



デッキの設置イメージ図

プラットフォーム跡の修復整備

専用鉄道敷跡を歩いてきた来訪者の休憩施設として、また周辺の景観を遠方から俯瞰する視点場として、既存のプラットフォームを修復し、休憩設備を整備する。

遊歩道の整備

来訪者が長距離を安全に歩きながら見学ができるように、線路敷の碎石に見たてた遊歩道の整備を行う（粒径20～30mmの碎石を敷き固める。必要に応じて透明樹脂バイндаによる結合処理を施す）。

現在の見学ルートを拡大し、万田坑は

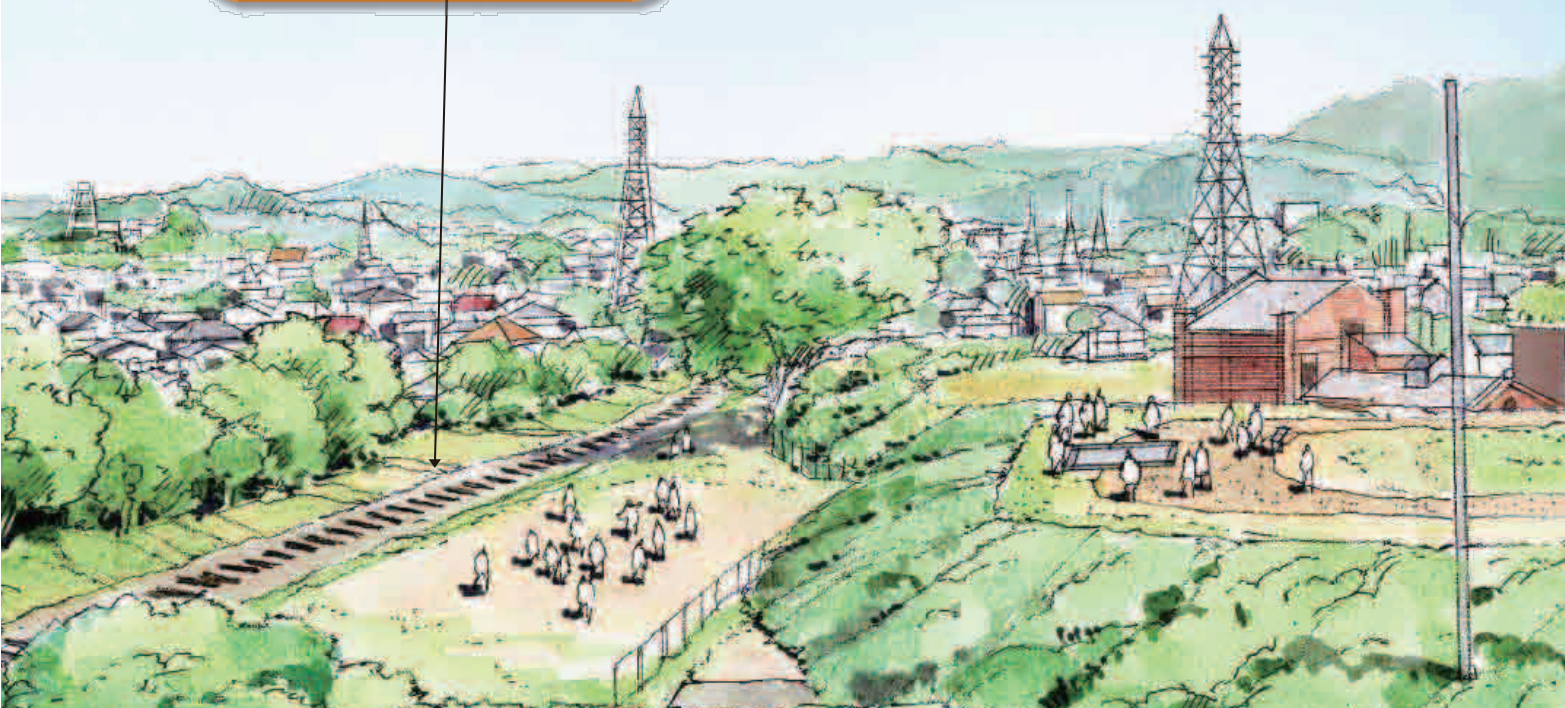
万田坑ステーション

あるべき将来像

明治期の産業革命におけるエネルギー生産の場である炭鉱の採炭・運搬のシステムと役割、そして石炭産業景観の広がりや重層化した歴史のスケール感を次世代へと継承し、これからのまちづくりのエネルギーとなる公開活用を進める。

第二竖坑ケージの移設

専用鉄道敷跡の公開



に従事した職員や鉱員の動きを理解する動線と、石炭の動きを理解する動線をつなげる。

人の流れ

炭鉱マンが使っていた通路の公開整備、第二竖坑ケージの移設等

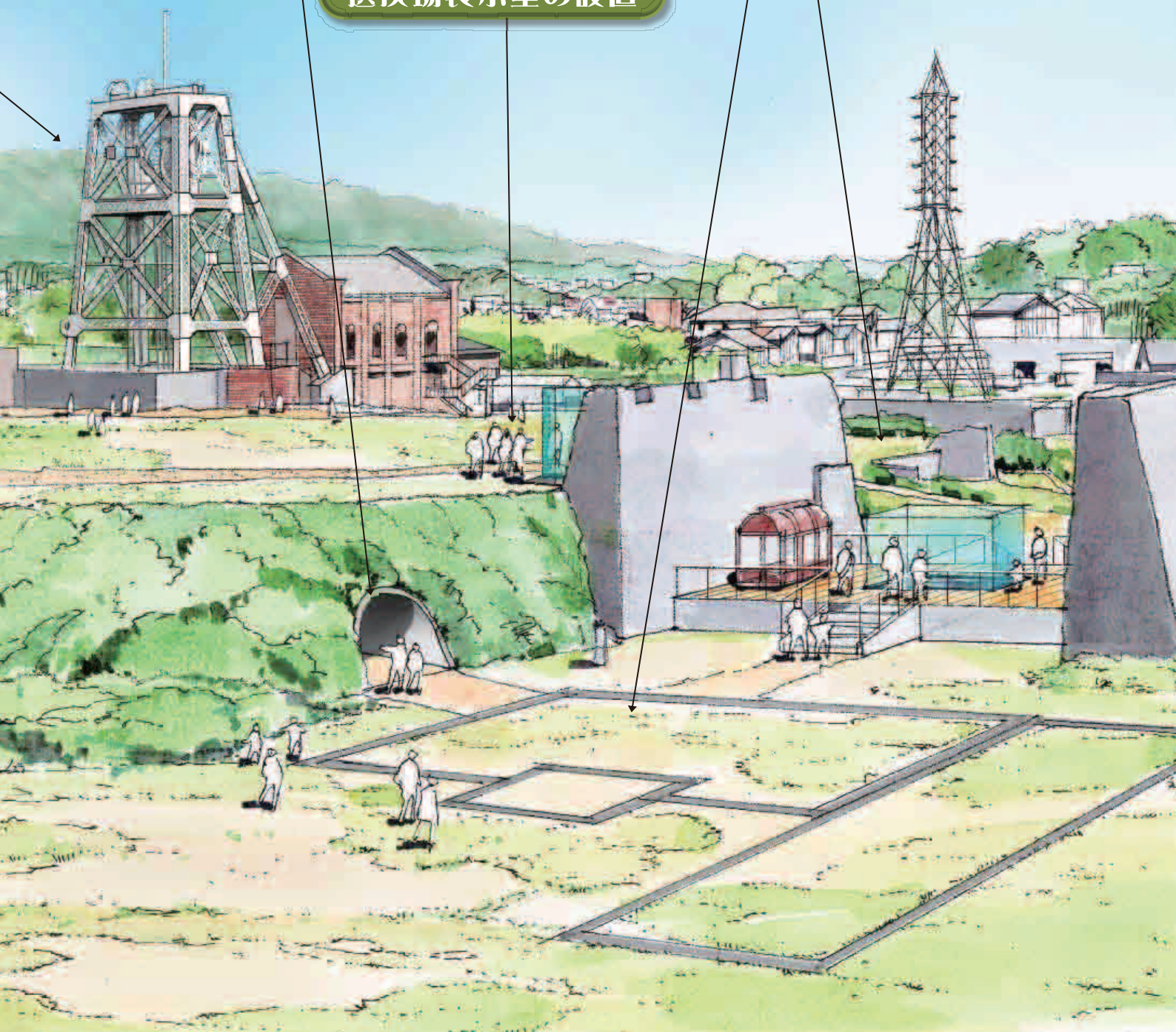
石炭と動力・給排水の流れ

第一竖坑と第二竖坑をつないでいたトンネルの公開、第一竖坑関連施設の整備等

豎坑連結トンネルの公開

第一豎坑関連施設の公開

選炭場表示壁の設置



万田坑跡

整備方針

万田坑跡及びその周辺については、平成9年閉山時の姿を基本に保存し、整備にあたっては、地盤調査など安全性、実現性の十分な調査を行い、景観に配慮した整備を行う。

来訪者に対しては、炭鉱の主要機能である坑口から採掘した石炭を揚げ、選炭した上で専用鉄道に積み込むまでの石炭の動きと動力・給排水の動き、それに従事した炭坑従事者の動きが分かる整備(効果的な動線)に努める。

また、それらを支えた施設機能や関係者の生活などについても来訪者が理解できるような整備を行う。



階段の設置(仮設による現状の整備)



第一豎坑観測橋、ケージの設置イメージ図



選炭場高低差表示壁整備イメージ図



遺構表示整備イメージ図

豎坑連絡トンネルの公開

石炭を生産していた当時の様子を理解するために、第二豎坑関連施設から、第一豎坑関連施設につながるトンネルを来訪者が安全、快適に見学できるように、土の掃き出し、照明の設置、トンネルの補強などを行う。

第一豎坑関連施設の公開

地底深くから掘り出した石炭を、地上に運び上げていた場所である第一豎坑坑口の内部を、来訪者が上から覗けるよう観測橋を設置するなどし、更に石炭を載せたケージが行き来していたことを説明するため、ケージの実物またはレプリカを坑口に設置する。



発行

2018（平成30）年3月30日

荒尾市

〒864-8686 熊本県荒尾市宮内出目 390 番地